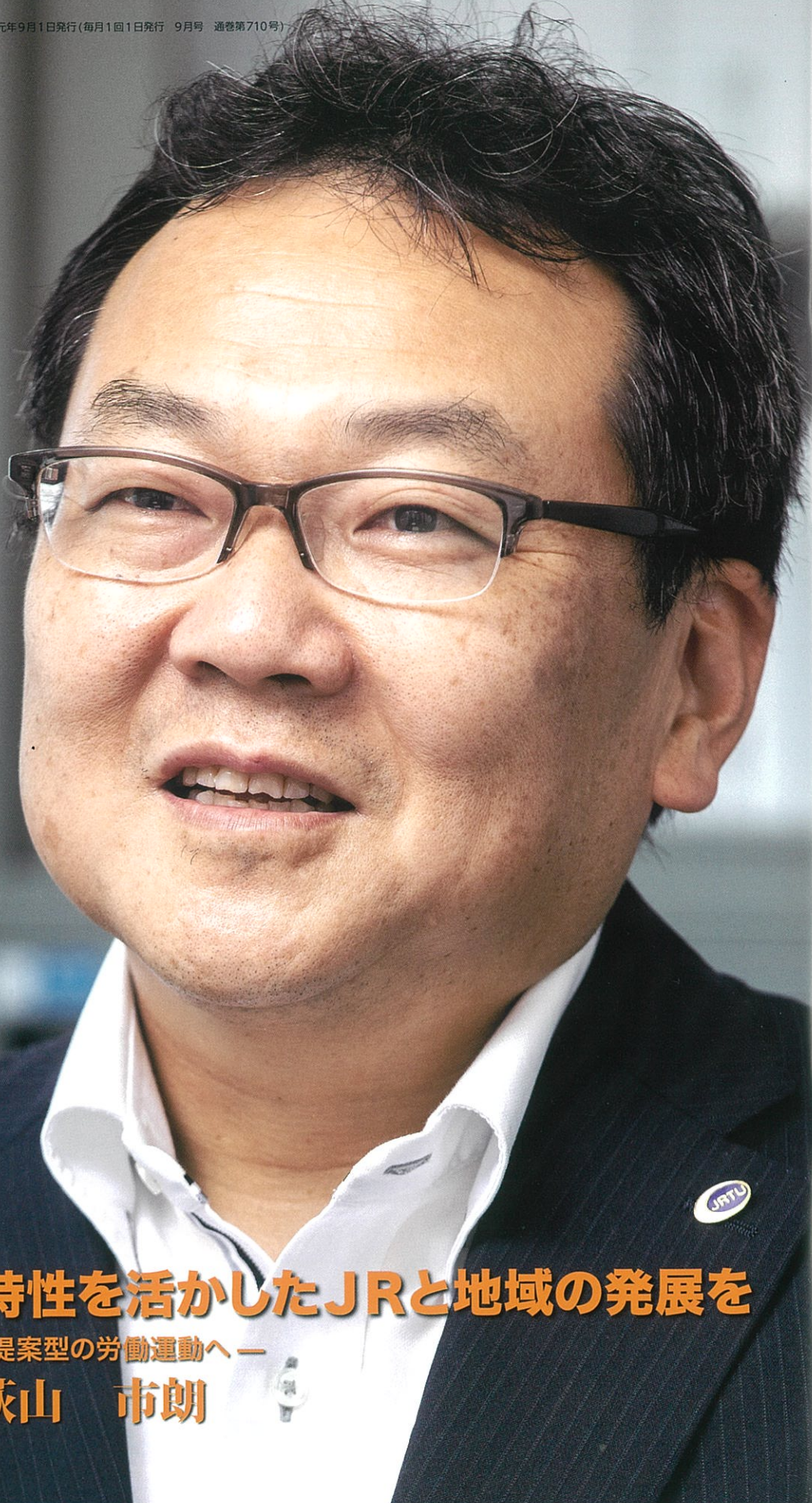


改革者

2019
9
SEPTEMBER



鉄道の特性を活かしたJRと地域の発展を

— 対決型から提案型の労働運動へ —

JR連合会長 **萩山 市朗**

本書の主要目次

- 【プロローグ】
「25の修羅場」が「25年連続黒字」をつくる
- 【上場企業破綻の修羅場】
「時代の寵児」と呼ばれた日本電子は、なぜ、破綻寸前まで追い込まれたのか？
- 【レストランの修羅場】
1000人の社員に修羅場を与えた「地獄の門番」近藤宣之
- 【修羅場社長のコラム】
無理難題を押しつけた私に、餞別をくれた代理店社長
- 【経営者不在の修羅場】
社長に強いリーダーシップがなければ、赤字から絶対に脱出できない
- 【いきなり再建を任される修羅場】
赤字から再建するとき、リーダーが最初にやるべき「3つ」のこと ほかに

近藤宣之
倒産寸前から
25の修羅場を
乗り切った社長の
全ノウハウ

売上は3倍
自己資本比率は10倍
純資産は28倍

25年連続黒字化!

不良債権、不良在庫、不良設備、不良人材……
不良以外何も無い修羅場からどうやって脱ったのか？

倒産寸前から25の修羅場を
乗り切った社長の全ノウハウ

近藤 宣之 著

ダイヤモンド社
1,728円(税込み)

一読して経営と人の
関りの大切さを知る

評者

宮坂 幸伸

安全保障研究センター
理事

倒産寸前だった会社を売り上げ3倍、自己資本比率一〇倍、純資産二八倍、そして二十五年連続黒字を達成した著者(社長)が如何にこうした偉業を成し遂げたかを克明に記したのが本書である。単なる成功物語ではなく、著者の直面した様々な困難な事態への対応などが実に詳しく語られている。

著者は自分の人生を「紆余曲折の人生でした」と言い、そのキャリアを一口で言い表すなら「修羅場」の連続であった、と言う。二十五年前の一九九四年、著者は「倒産寸前の会社」への出向を命じられる。その会社は赤字が恒常化し、一億八〇〇〇万円の債務超過に陥っていてメインバンクからも見放された崖っぷち会社、その再建を託されたのだとして「現預金はなく、あ

るのは不良債権、不良在庫、不良設備、不良人材ばかり、社内は『不良』以外は何もない修羅場でした」と著者は當時を評している。

更に著者は「これでもかと襲いかかる『25の修羅場』を乗り切り、どうやって倒産寸前から『二十五年連続黒字化』したか、その『全ノウハウ』を収録した初の本です。きれいなこと一切なし、全て『本当に起きたこと』です」と記している。そして25の修羅場を挙げ、それぞれにそこに至った経緯、解決のためのポイントを示している。例えば第

二の修羅場として挙げた「レストランの修羅場」では、一九七二年、二八歳で労働組合の委員長に就任、直後に会社の再建、合理化が本格化したという。そして「何のために実行するのかがいまいちな合理化策は必ず失敗します」として単に人減らしの為に子会社を設立しても成功するはずはないと言う。

更に「社員の雇用を犠牲にするのは『経営の失敗』である」と断言、雇用については、「去るも地獄、残るも地獄」由があらうと「赤字は犯罪」と言い「今の私は社員の生涯雇用を守ることが社長の責務だと考えている」として数々の経験を経て「人を大切にしよう」が現在の会社の雇用の基礎にあると言う。

25の修羅場はそれぞれ一読を願うとして、六編収められている「修羅場社長のコラム」が面白い。ここにはこうした偉業を実現してきた著者の考え方、人柄が見えるからだ。「無理難題を押し付けた私に、餞別をくれた代理店社長」「私の痛恨のミス、採用の失敗はお金と時間の損失」等々。その中には労組委員長時代の民主的労組と左翼労組の闘い、民主的労組の勝利に至る経緯も含まれている。

単にノウハウ書ではなく、読み物としても面白く経営を考える上で多くの示唆を与えてくれる書である。

箴言集

ラ・ロシュフコー 著



講談社学術文庫
1,166円(税込み)

十七世紀仏文学の新訳。モラルリストによる人間観察は今も通じる。短い格言

はどこからでも読める。「料簡の狭い知性で頑固さを作り出す」「自分がなす悪をすべて自覚するほど聡明な人間はめったにいない」「大きな恩義に対しては、誰もが忘恩を決め込む」「男は愛されているときのほうが浮気しやすい」「憎悪が激しすぎると、われわれは自分が憎む相手以下の人間になってしまふ」など。著者は佐々成政ほどの勇猛な武将であり、フランスが文明の中心とされていたのもわかる。

流言之メディア史

佐藤 卓己 著



岩波新書
972円(税込み)

「フレイクニュース」の問題が、巷間を賑わせている。メディア報道の問題

を超えて、政治・経済など社会生活のあり方にさまざまな問題を投げかけているからである。宣伝と陰謀、流言飛語は、高度情報社会の現代にとどまらない。歴史にさまざまな問題を投げかけた事例は、古今東西枚挙にいとまがない。「フレイクニュース」の問題は、新たな技術を身にまとい出現したに過ぎないのである。歴史を振り返り、メディア・リタラシーを得る好著であろう。

ミミミミミミミミ